

村上忠順翁顕彰会報



新馬場神明宮駐車場から見た猿投山（撮影：酒井）

★ 目次 ★

村上忠順翁顕彰会報 第27号

編集 村上忠順翁顕彰会事務局
発行 平成28年3月30日

- ・改めて今、村上忠順を通して考える人の生き方 2
- ・「刈谷八景」選定の経緯 3-4
- ・女性部研修会
「中津川・岩村研修の旅に参加して」 4
- ・明治14年の村上忠順 5-6
- ・平成27年度活動報告 6-7
- ・忠順大賞入賞作品 7-8

改めて今、

村上忠順を通して考える人の生き方



村上忠順翁顕彰会 会長 近藤 光良

平成二十七年度を振り返ってみると実にいろんなことがありました。

悪いことからあげてみると、イスラム国による中東の紛争拡大、大量のシリア難民発生、異常気象による栃木県鬼怒川の風水害の発生、さらに痛ましいのは殺人事件の多かったことです。わずかなお金のために、老々介護の疲れ、あるいはちよっとしたいじめから人の命を奪ってしまうという悲しい事件が相次ぎました。これ程人の命が軽々と奪われていいものなのか一体社会では何が起きているのか、考えると悲しくなってきました。

悲しいことばかりでなく、嬉しいこともたくさんありました。昨年もノーベル賞受賞者が二人ありました。梶田さんの物理学賞、大村さんの生

理学賞でした。二人とも決して派手な研究でなく、地道な努力の末に、宇宙の起源を探る上での貢献と、難病の予防に効く薬品の開発が評価されたことでした。

また、豊田市にも関係しますが、ラグビーワールドカップにおいて、日本チームが世界屈指の南アフリカチームに勝ちました。そして、勝利を導いたのが五郎丸選手でした。この時の日本チームの判断力は素晴らしかった。安全な同点を狙うか、難しい逆転勝利を狙うか、瞬時に判断する必要があった。結果として、逆転勝利を狙い成功しました。

このように良いこと、悪いことを含め毎年いろんな出来事が起こります。日々変化する中で、私たち村上忠順翁顕彰会では、百五十年以上前に村上忠順が残した手紙や書物を読み解き、あるいは史跡を訪れて昔の人たちの考えや当時の生活・環境を

知り、今の自分たちにとってプラスになることを学ぼうとしています。

いったい何を学ぶのか、中国の思想家「孔子」の言葉を書き留めた「論語」の中に、「温故知新」という有名な言葉が出てきます。「古きをたずね、新しきを知る」と訳されます。古いことを学ぶことによつて、新しい知識や生き方を見つけることができる、といった内容です。孔子は紀元前五百年くらいに活躍した思想家ですが、孔子の残した言葉や思想は今でも世界の多くの人々に影響を与えています。日本でも江戸時代の学者や武士たちの生き方に大きな影響を与えてきました。そして、現代においても、日本の政治家や事業家をはじめ多くの方々に影響を与えてきました。時代は変わっても人の悩み、考えることはそれほど大きく変わってはいないように思えます。

人の命を考えるにしても、人類に役立つ偉大な研究をするにしても、どのように生きるか、人と人との関係をどのように保つかなど、基本的な考えを遙か昔の人たちが悩み経験したことを学びながら、自分の生き方を考えていくことが大切のように感じます。

一昨年から名古屋大学の塩村先生に村上忠順翁の書いた手紙を解説していただいています。なかなか

難解です。しかし、学ぶ中で江戸末期の社会の様子や人との付き合い方、生き方がいきいきとよみがえってきます。同時に、先生の解説で現代社会の問題をどう考え、行動すればいいのかを学ぶことができ、楽しい時間でもあります。これを叢書にして残し、多くの人に学んでいただければ村上忠順翁顕彰会の大きな成果であると思います。

昨年は顕彰会を発足当時から支え、盛り上げていただいた先輩の田中伸一さんが亡くなりました。顕彰会の発展に大変尽力していただいたことに感謝申し上げます。これまで篠瀬先生、新行先生も相次いで亡くなられ、まことに残念です。諸先生、先輩のご冥福をお祈りするとともに、後輩として更なる顕彰会の発展に尽くして参りたいと考えております。



「刈谷八景」選定の経緯

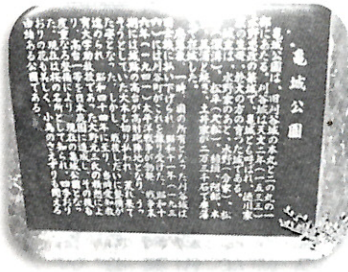
事務局 近藤銆司

はじめに

明治初頭に選定された『刈谷八景』は、だれが選定したのか定かでない。刈谷八景を詠んだ忠浄とも忠順作とも言われ、ともに噂の域を出るものはない。

一 「刈谷市史だより」には

第三十二号（平成十一年三月）には、『刈谷八景については特に定めたものはありませんが、古くは江戸時代に刈谷藩の御典医を務め、国学者でもあった村上忠順が八景の歌を詠んでいます。』と述べている。しかし、忠浄の刈谷八景の歌が巷に流布しているためか忠浄作との説も、ささやかれている。



亀城彩藹

二 選定された経緯の真実は

忠順は、刈谷藩医としての公的な生活記録を『座右記』に記している。そのなかで、明治三年の項に、以下の記述がある。

- 一月十四日 知事八景ノ咄アリ (中略)
- 一月二十八日 コノ日八重子八十賀会ナレバ新堀ヘマハリ一宿シテ二十九日帰宅

- 亀城彩藹 市原布帆 八橋紫燕
- 村積晴嵐 知立神社 堺川秋月
- 柯林宿鳥 狭投書齋
- 知事ノ命ニヨリ定ム (中略)
- 十一月十六日 タヨリ四ツマデ日 本外史質問 刈谷八景ノ短冊進上
- 夕飯ヲタマフ (後略)



市原布帆

これによれば、明治三年の一月十四日に藩知事の土井家九代利教君から相談があり、忠順が刈谷八景を奏上し、二十九日以降に知事の名前で公布され決定をみたということにな

る。

さらに、十一月には、忠順作の刈谷八景の歌を短冊に記して殿に献上し、ご褒美に夕飯を頂いていることもわかる。



八橋紫燕

三 藩知事はお興入れした直後

ここで、知事と忠順とのかかわりを少し深く眺めてみる。刈谷藩主土井利教は、十九歳の慶応二年十二月に興入れたばかりの身。当時の刈谷藩は、勤皇派の胎動を沈めるために急遽佐幕派の播磨藩からお興入れを願ったばかり。

一方、忠順はといえば、官軍の東征総督になった有栖川宮熾仁親王を支え、戊辰戦争の戦勝祈願文の起稿や深見篤慶を通じて官軍への巨額な軍資金を調達したりして、重きをますます増していたときである。

この八月には修道館の助教になり、神道への傾注をますます深め、有栖川宮の後ろ盾としても重きを成す存在になっている時期と重なる。

四 知事ノ命ニテ定ム

利教藩知事は、刈谷八景の答申を受けて一カ月後の二月二十九日には、『知事君堤宅来駕』の文字が見え、四月九日以降知事君への『英国志』講義の文字が度々並ぶ。利教藩知事の忠順への傾倒振りというか徐々に私淑さえしていく様子が窺える。知事ノ命ニテ定ムと記した忠順翁のたり顔が眼に浮かぶ。



村積晴嵐

五 八重子八十ノ賀ナレバ

八重子の傘寿の賀宴に出席して一泊・・・八重子とはもちろん新堀



知立神社

村の深見篤慶の義母であり、忠順の長女の愛子の義母でもある。また、忠順から見れば母親の実家でもあり、誠実な門人篤慶の義母でもある。三河木綿の間屋として財をなし、官軍有栖川宮の大きなスポンサーとして支えている人物のご母堂の賀宴である。回り道をしてでも顔を出さないわけにはいかない。



堺川秋月

六 忠順の八景歌

十一月十六日には「刈谷八景ノ短冊進上」の文字が見えるので、忠順が八景を詠んだ歌が存在することは確かであろうが、私自身いまだ拝見していない。



柯林宿鳥

七 忠順と忠浄の間

忠浄が刈谷八景を詠んだのは、『歌意から判断すると明治十年ごろの作品ではないか』と三ツ松悟氏は著書『刈谷八景類題』の中で推測してみえる。忠順選定の八景が明治三年選定となればこの間七年余りということになる。

この期の日本は、ご一新の荒波が怒涛のごとく荒れ狂っていた時期である。揺れ動く世相の中で忠浄は亀城彩霞とし、

かげ高き亀の大城の示松

みどりも深くたつ霞かな

と詠んでいる。慣れ親しんだ城郭も取り壊され、ただ松の大本が彩りの美しい霞の中に立ち、在りし日の面影を湛えていると詠嘆している。忠順の「彩霞」は樹木がこんもりとみち溢れている様を表出しているのに反し忠浄は五色の彩りのいい雲気を表現している。胎動する七ヶ年間は、実に大きくて深く長い。



狭投暮雪

女性部研修会

「中津川・岩村研修の旅に参加して」

中野初子

今にも降り出しそうな梅雨空の下、忠順翁顕彰会女性部研修会の参加者一行四〇名を乗せたバスは一路中津川に向って高速道路を走りました。約一時間半程で第一番目の見学地の「ちこり村」に着きました。ちこりはヨーロッパ原産のキク科の野菜だそうです。ガイドの方の説明では初夏の頃、ゴマ粒の様な種を播き秋に葉が枯れたら、さつまいもの様な根を取り入れて、梓にぎっしり立てて入れフォームの中で育て、再び伸びてきた芽を食べるのだそうです。根にも豊富な養分があり「ちこり焼酎」も作られています。皆んな買ったお土産を手に手に次の目的地へ向かいました。

夜がらす山荘「長多喜」では、その昔皇女和宮様が江戸の將軍家茂の元へ嫁ぐ時中津川に宿泊され、その折召し上がったという料理を戴きました。この昼食は私が最も楽しみにしていたものでした。足付きのぬり膳にぬり物の器で一汁三菜と香の物

にふた口で食べ切れてしまう程のご飯です。一瞬量の少なさに驚きましたが味が良く、当時の和宮様になった気分と和宮様に思いを馳せてゆつくり戴きましたら、不思議とお腹も一杯になりました。

そして、本日の最終目的地の岩城跡へ、天候も悪く、足に自信もなかったので城跡には登らず資料館を見学して、城下町を散策しました。そこで知った先人達の立派な生き方や活動に心うたれ、歴史のおもしろさ、楽しさを堪能しました。最後に佐藤一斉の「子供の時に学んで置けば大人になって役立つ、大人になつて学んで置けば老年になつても気分が衰えない、老年になつて学んで置けば死んでもその名や精神は朽ちることはない。」老年の域に達している私には手遅れの感もありますが、今回学んだこの言葉を力に生きていきたいと思えました。素晴らしい一日を計画して下さった主催者の皆様から感謝申し上げます。ありがとうございました。



長多喜にて

明治十四年の村上忠順

東京都立小岩高等学校主幹教諭
國學院大学講師 中澤伸弘

このたび村上家から忠順が亡くなる三年前の、明治十四年の日次記が見つかった。翁には幕末の文久四年から明治四年までの九冊、明治十年の一冊の都合十冊の日次記があるが、明治十四年のものが発見されてこれで十一冊となった。晩年の記録とあつて、相変はらずの読書記録が主であるが、その中からいくつかの翁の周辺のことに分かるので紹介してみよう。

一
翁にとつてこの年の大きな出来事は、嘗て自ら編んでゐた、師である紀州の熊代繁里の歌集『櫻蔭集』が出版できたことであつた。これは翁にとつて最後の出版書物となつた。翁が繁里に入門したのは安政七年であつて、その死が明治九年六月五日であつた。自分よりも若い繁里を師として十五年余りの年月を師事したのである。翁は繁里の歿後すぐその歌稿を整理し、二十日後に『花

蔭歌集』を編んだ。(刈谷、村上文庫蔵)書名は繁里が『花蔭』『櫻蔭』を号としたことによる。そしてその序に「まなびの道ただしく、身のおこなひめでたくして、やまとだましひいみじき人ひとりなむある。そは紀国日高ノ郡三名部人にして、氏を熊代、いへの名を桜蔭となむいふ」「此君をおきては今の世にては大和心たかく大和魂かたく、(中略)まなびの道いたりふかく、歌の道すぐれたる人はあらじとおもふ」と師を国学者として高く評価するのであつた。また翌年の二月には追悼の歌会のため「寄花懐旧」の題で歌を募つてゐる。

櫻蔭の追悼會の歌を人々に
こひまをすことの葉

わが櫻蔭繁里翁ハちかき世に稀なる歌よみにて、さらに人の跡をふまず、趣のあらたしきハなにくれの歌集を見てしるべきなり。しかるに去年の六月とみやまひおこりて身まかり給ひぬれば、まさかと嘆きをしみかなしめどもかひなしぞ、かく此翁みやびこころたかき中にことに櫻を愛られて、家の名をしもさくら蔭とおふせられたり、かれそなたならせたりし花の木蔭

にをしへ子をつどへて、ありし世忍ぶ歌のまとゐをも、もよほしなんと家としのはからひてたにぎくの新たに調いたし、翁の親しくおはせし大人たちにもこひまをして(中略)花のここの葉を手向草と奉らんとす、さらば亡霊も花の梢に天翔り来ていかばかりめでよるこびおほし題は寄花懐旧とは定めつれども大人たちのみこ、ろのまにまによませ給ふも妨げあらずなをしへ子等謹てまをす

明治十年二月

追悼の會は「家とし」すなはち繁里の後妻である、すが子が催したやうで、「花の木蔭」とあるのは繁里を慕ふことを意味するが、また、春先に行はれたのであらう。翁は、繁里の歿後二年を経過した明治十一年に『花蔭歌集』から更に精選して『櫻蔭集』を編集したのであつた。その跋文にあたる長歌には明治十一年十一月一日となつてゐる。

花ぐはし櫻かげ大人、このをぢのかげにいよりて、あふぎつ、ふりさけみれば、言の葉の花さかりなり、咲を、る千々の梢は、香ぐはしき色ぞくすしきも、え出る萬のにひ葉、まぐはしき

にほひよろしも、いひもえず名づけもしらにそのかげをいたちはなれず、夜に日に見れどもあかず、あきにけにみれどもあかず、あはれあはれめでたくもあるか、いかにしてなにとた、へむ、よそふべきものこそなけれど、たぐふべきかたこそあらね、玉ならばあわびしら珠、きぬならばむらさきのあや、あやにあやにあらぐはしもよ、時じくにしたることしらぬ櫻蔭大人

『櫻蔭集』はこれに橋東世子の序文(十二年九月望)をつけて完成し、翌十三年四月に板権許可の願を提出してゐる。

二

『櫻蔭集』は扉にも巻末にも「明治十四年九月廿四日版權免許/同年十二月二十五日出版」とある。私の手許のものには書袋もあり「定価金六十錢」とある。また忠順が編輯兼発行人となつてゐて、書店が関与してゐないやうである。

そこで明治十四年の日次記を見ると十月五日条に「知立郡役所櫻蔭集板ケン免状ウケ取、十時出二時帰」とあり、ここで九月二十四日付の許可証を受け取つてゐることが分かる。そして十二月二十七日条には「櫻蔭

集四部巴ヨリ来」とあり、ここで初めて刊行された師の歌集を手にしたことがわかる。順調に十二月二十五日に出版されてみたことはこれで裏づけられる。許可が下りてから出版の用意をしても木版なので日子はかかる。忠順は予めこの作業を進めてみたやうで五月十四日に「櫻蔭集校合十四枚」、十月二十四日にも「櫻蔭集校合」、出版間近の十二月十日、十二日にも「櫻イン重校」「櫻イン對校」と書かれてゐる。また七月二十五日条には「木国クマシロ返事」とある。すが子は十三年に亡くなつたのでこは長女のナカへ向けて書いたのであらうか。歿後も遺族と関係があつたことが知られる。

ところで『櫻蔭集』を送つて来た「巴」とは誰であらうか。出版に関与した人物であらうが不明である。日次記の九月二十六日条に「東吉同行岡崎巴太郎往 金米進物」、出版間際の十二月十五日条に「浄ヲカザキ巴太郎行」とある人物のことであらうか。この浄は忠浄のことであらうか。

またこの年の嘗ての師である石川依平の三月の例祭に「寄柳徳昔」の題で歌を詠んで寄せた翁であつたが、この年はこの師の歌集『柳園集』を平尾八束ら遠州の門人たちが出版した。私の手許のものは六月三十日

出版とあるが、翁が手にしたのは年末であつたことも日次記からわかる。一つは自分が編んだものだが、晩年に二人の師の歌集を二つも手にした翁の思ひはいかばかりであつたであらうか。

六月二十六日条にはかうある。

「東京藤井希璞書状着 宮様ヨリ藤十へ千疋恩賜来」と。藤井希璞は近江の日吉大社の神職生源寺希烈の子で有栖川宮家の家令職であるから、この宮様は熾仁親王である。藤十と娘婿の篤慶に恩賜の品があつたことの通知である。翁は前年六月に親王の召しにより上京してゐるので、これもそれに関係したことであつたのだらうか。七月二十二日にこのお返しであらうか、「有ス川献本ニヒホリ出」とある。ニヒホリは藤十こと深見篤慶である。

また年末の十二月二十八日条に「河水久澄認ニヒホリ出」とある。これは翌十六年の歌御會始の勅題「河水久澄」の歌を詠進したことを意味する。当時はこのやうな年末でも詠進が可能であつたことが分かり興味深い。

明治十四年、翁は七十歳。それでも毎日の読書、抜書がなされてゐたことも判つて驚くばかりである。

平成二十七年度

活動報告

○ 五月十日

* 定例総会

参加者八十七名



総会の様子

* 記念行事

・ 西山万歳



西山万歳

* 記念講演

「蔵書から見た村上文庫」

講師 文学博士

高木 浩明先生

* 「忠順大賞」表彰式



講演風景

表彰風景



○ 七月五日

* 女性部研修会

「江戸食文化と女城主岩村の旅」

参加者四十名

・ ちこり村

・ 中津川 長多喜

・ 岩村歴史資料館

・ 岩村城

・ トヨタ鞍ヶ池記念館



岩村歴史資料館にて

○ 十月二十七日

＊歴史探訪

「刈谷八景の今」

参加者三十三名

- ・刈谷市中央図書館
- ・亀城公園
- ・境川
- ・市原稻荷神社
- ・知立神社
- ・トヨタ会館



市原稻荷神社にて

○ 九月五日・十月三日

十一月七日・十二月五日

＊四方樹大学

参加者延べ六十五名

講師 名古屋大学大学院教授

塩村 耕先生

講義内容

・「手紙文」



講義風景

○ 十一月二十三日

＊忠順翁命日墓参

- ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

忠順大賞入賞作品

応募期間 十一月二十三日から
一月三十一日
応募総数 一七三三首
入賞者 二十名
選者 荒川心星先生

入賞された二十名の方とその作品を紹介します。

小学生の部

豊田市長賞

堤小 六年三組 峯 妃南

深呼吸遠くの拍手聞こえる

手に汗光りけんばんたたく

※阿伝の演奏者と聴衆の息づまる一瞬間を捉えた一首。結句の思いは深い。

豊田市教育委員会賞

堤小 六年三組 中野 紗也

父さんと雪山目指し突っ走る

こっちは小雨あつちは吹雪

※自然の動きを巧く捉えた一首。「こっちは小雨あつちは吹雪」は素晴らしい表現。

会長賞 金賞

堤小 六年四組 廣瀬 心音

友達と神社で年越し寒い空

大きいどんどこたちまち燃える

※年越しの空と五穀豊穡を祈るどんどこ焼きの情景が目に見え、心に残る一首。

会長賞 銀賞

堤小 五年二組 清水 亜胡

燃えさかる炎を囲み見上げれば

暗いやみ夜に星が輝く

※キャンプファイヤーを囲んだ交歓の様子が浮かんでくる。下の句がすばらしい。

会長賞 銅賞

堤小 四年一組 石川 心桜

原っぱで風になびくよたこふたつ

青空の下笑顔もふたつ

※風上げの遊びが手に取るようである。結句の「笑顔もふたつ」がいいですね。

中日新聞社賞

駒場小 六年一組 風間 優花

一目見てこれ良さそうと買った本

どんどこたまる読書の秋

※本好きの子は心豊かである。下の句が光っている。

優秀賞

堤小 五年三組 堀越 未月

父さんとのつたのつたはじきとぶ

あったかい胸にまたちようせんた

※力強いうた、心が躍るうた。いいお父さんですね。

優秀賞

堤小 三年二組 前田 真末

いつまでも感謝してるよ給食に
みんなの力もってるから

※下の句の「みんなの力もってる
いるから」がとてもいいから心を
打たれる。

優秀賞

堤小 一年四組 広瀬 由依菜

かあさんとなかよくつくるハンバーグ
まるくねねわあおいしもう

※お母さんといつもいっしょよ。

「まるくねね」がいいですね。

優秀賞

駒場小 二年二組 古畑 ヤマオ

しゅくだいがやうとおわってほっとして
かおをあげたらこはんのおい

※とてもいいです。

「苦は楽の種」がわかりますか。

○ 中学生・一般の部

豊田市長賞

前林中 三年七組 藤井 祐希

おはようと地域の人と朝交わす
気持ちのいい日はあいさつからだ

※気持ちのこもった素直な一首。
下句の「気持ちのいい日はあいさ
つからだ」は前向きな宣言。

豊田市教育委員会賞

前林中 一年三組 酒井 未来

文化祭で歌ったあの姿
どんな星より輝いてたね

※美感のあふれた一首。

下の句の表現がすばらしい。

会長賞 金賞

前林中 三年二組 伊藤 茉央

ほほえみとありがとうのひらりと
つながる心ひろがる笑顔

※素直な歌で心にひびく一首。

そして誰もがそう思うのである。

会長賞 銀賞

前林中 二年四組 佐藤 巧望

立志式感謝の気持ちつたえたい
あらたな自分にあうために

※立志式への感謝の一首。

下の句の思いは深い。

会長賞 銅賞

前林中 三年一組 山内 保津妃

目標へともに走った仲間たち

流したものは努力のあかし

※共感を呼ぶ一首。真情が滲んで
いる。

中日新聞社賞

前林中 三年一組 戸田 静香

油絵のにおいと共に思いだす
友とすごしたあの部活動

※部活動の思い出はなつかしい。

上の句にその気持ちが表現され
ている。

優秀賞

高岡町 早川 寛子

忠順邸の目鼻の先で育ちし吾

偉大さ認識らざる年経ることに

※素直な美感に共感を覚える。

優秀賞

高町 久保 充恵

国学や短歌に典医と才長けし
郷土の「忠順」知りて憧る

※「忠順」の偉業をよく勉強され
た方ですね。

優秀賞

前林中 二年一組 渡辺 美咲

変わりゆく季節によって気持ち変え
明日へ明日へと踏み出す一步

※希望に燃え決意を固めた一首。

優秀賞

前林中 一年二組 鈴木 愛佳

夕ご飯家族だらんらんらん
笑顔はずむし心はずむ

※愛情に満ちた家族の楽しい一
首。

編集後記

本年度の歴史探訪は、現在の「刈
谷八景」の風景を訪ねました。それ
ぞれの場所では忠順翁の見られた景
色との様変わりが伺えます。

また、四方樹大学は、塩村耕先生
による「続 忠順翁の手紙を読む」
と題し講義を受けさせていただくこ
とができました。新たな忠順翁の観
点から忠順翁の顕彰をすることがで
きたと思います。

総会では、西山万歳保存会による
「西山万歳」を披露していただきま
した。

本顕彰会を支えてくださる方々、
またこの会報を発行するにあたり御
協力いただいた皆様に心より感謝い
たします。
(事務局 長谷川)